

Beyond Policy: Conferencing on Student Misbehavior

政策の先に:生徒の誤った行動に対するカンファレンスの開催

Lorenn Walker, J.D., M.P.H.

ローレン・ウォーカー 法学博士、公衆衛生学修士

校則違反への対処だけでなく再発を減らすためのカンファレンス・アプローチ

息子の高校の副校長から電話があり、「ウォーカーさん、今トレント君が副校長室にいます。彼は大丈夫ですが、他の生徒に頭を叩かれたようです。」と言われました。私は急に吐き気が襲ってきて「医者に診せる必要はありますか？すぐに行った方がいいですか？」と尋ねました。すると「いえ、彼は保健師さんに診てもらいましたが大丈夫です。ちょっと気が動転しただけです。」と副校長は安心させるように答えました。続けて彼は「トレント君を叩いたのはビクトール君です。」と言いました。私はすぐに10年前の二人のことを思い出しました。二人がサッカーのユニフォームを着てゴールめがけて芝のサッカー場を走り回っている姿です。彼らは数年同じチームに所属していました。そのころ二人は今より仲良しでしたが、ビクトール君は自分の思い通りにならないとすぐに怒って荒れる傾向がありました。

私は副校長に警察は呼ばないように納得させ、ビクトール君を停学処分にはしないように懇願しました。「彼を学校から追い出したら増々トレントへの怒りを昂じさせるだけです。何より彼は学校に居続ける必要があります。」と私は主張しました。しかし副校長は、彼は“校則”に従って3日間の停学処分を受けるべきだと断言しました。その日学校の後トレントに会うと彼は大丈夫そうでしたが、私は気が気でありませんでした。ビクトール君が学校に戻ってきたとき、息子にどんなことが起きるのか心配せずにはいられませんでした。

この事件が起きた時、偶然にもちょうど私は少年犯に対する修復的正義に関する調査計画を進めているところでした。私は公衆衛生の指導者となる前は法廷弁護士でした。私は人々の問題解決の役に立ちたいと願いロースクールに入りました。しかし、法廷弁護士になった後、その敵対的な流れでは通常、問題は残ったままで解決しないことに気が付きました。公衆衛生学を学び、人々の問題解決を助ける衛生的なアプローチを学んだことで人々を助ける最も効果的な方法は彼らが自分の問題を解決できるように後押しすることだと気が付きました。この考え方は対立解消法といった加害者が服役中に被害者とともに問題解決

の流れに参加するという方法にも応用されています。

学習するには講義形式のものより参加型の教育の方が効果的であることが知られています(Tharp & Gallimore, 1988)。このことは誤った行動を取ってしまった生徒に対応する際にも当てはまります。教師や校長が単に加害者側の生徒に彼らの行動は間違っていると話し、何故そのように不正な行動を取るのかと尋ねてみる代わりに、彼らの行動がもたらした結果がどのようなものであるかを自ら認識し、その誤った行動によって引き起こされた損害を修復しようとするという問題解決のプロセスに彼らが参加するようにした方が更に効果的です。このプロセスは加害者が自らの過ちによって誰がどんな被害を被ったのかを見つめなおすように促すことから始まり、正常な状態に戻すためには何をしなければならぬかを考えるまでに至ります。このような流れがカンファレンスと呼ばれています。

カンファレンスの流れ

カンファレンスはグループでの対立解消プロセスで、加害者が自らの過ちを認めたのちの関係修復に焦点を絞っています。カンファレンスには被害者、加害者と両者の家族や友人といった影響を受けたコミュニティーのメンバーが参加します。このプロセスは主にニュージーランドのマオリ族などの先住民族の考え方をもとにしています。ハワイ人、アメリカ先住民、カナダ先住民、といった他の多くの文化の中にも類似の対立解消方が見られます(Maxwell, 1996; Shook, 1985; Schiff, 1998; & Stuart, 1996)。

カンファレンスは修復的正義(司法)の実践(restorative justice practice)です。修復的正義は”刑事的司法”(criminal justice)に対する別のアプローチ手法で、15年程前から現在の司法システムへの行き詰りへの対応として発展し始めました(Pranis, 1996)。現在の司法システムは主として報復的価値観に基づいており、“犯罪は国家への侵害で、法律違反と罪への責任によって定義される。司法は体系的な規則に方向づけられ、加害者と国家との間の争いの中で、罪を決定し苦痛を科す”(Zehr, 1990)となっています。これに対して修復的司法は次のような原則に基づいています。“犯罪は人々やその人間関係への侵害であり、事態を正常化する義務を負っている。司法は修復・和解・安心を促進する解決探しに被害者、加害者とコミュニティーを関与させる。”(Zehr, 1990)。カンファレンスを学校に導入することで生徒の再犯が著しく減少するので校長等に注目されている(Cameron & Thorsborne, 1999)。

ビクトール君がトレントを叩いたとき、私はホノルル警察で連邦政府資金によるプロジェクトにかかわっていました。それは青少年犯罪者をカンファレンスへと離脱・転換(ダイヴァージョン)するプロジェクトで、そこで私は似たようなケースを扱っていました。犯

罪行為を認めた青少年犯罪者は通常の警察と裁判所による介入へ回される代わりにその扱いがカンファレンスへと回されるのです。ですから私たちにもカンファレンスが必要だと思いました。トレントの高校の校長先生はカンファレンスのことを良く知っていて、すぐに学校側も参加すると言って下さいました。警察でのカンファレンスのファシリテータの一人がご近所の方で、私たちのカンファレンスを招集し、ファシリテータとなることを引き受けてくれました。彼はビクトール君の父親に連絡をして、父親は息子と一緒にカンファレンスに参加することを承諾してくれました。

リアル・ジャスティス・カンファレンス

警察でのプロジェクトでは“リアル・ジャスティス・カンファレンスモデル”¹が使われていて、ビクトール君とトレントとのカンファレンスでもこのモデルを使用しました。修復的正義には、“ファミリー・グループ・カンファレンス”、“コミュニティー・カンファレンス”、“ファミリー・グループ・ディシジョン・メーカー”、“リアル・ジャスティス・カンファレンス”などいくつかのモデルがあります。

リアル・ジャスティス・カンファレンスでは、参加者が円形に座ります。参加者は、被害者、加害者、彼らの支援者（家族や友達）、影響を受けたコミュニティーのメンバーで構成されます。事件が学校で起きたり、生徒が巻き込まれたとき時には学校がそのコミュニティーとなります。カンファレンスのファシリテータは中立的な第三者が務め意思決定には加わりません。そして進行表に従って参加者それぞれに一連の開かれた質問を行います。

リアル・ジャスティス・カンファレンスには基本的に4つの段階があります(O'Connell, Wachtel & Wachtel, 1999)。最初は加害者が自分の取った行為について説明をし、その時、そして今までの間考えていたことや自らの過ちによって影響を与えたと思う人について語ります。次に、他の参加者がそれぞれ加害者の誤った行為によって受けた影響について語ります。3つ目に、グループで加害者の誤った行動によって受けた被害を正しい状態に戻すためにどんなことが実行され得るか話し合っ決定します。最後に、合意書が文書化され、参加者全員がサインをします。それでカンファレンスは終了となり、一緒に軽食を取ります。これは関係修復を象徴するもので、聖体拝領の儀式のようなものです。

ビクトール君とトレントとのカンファレンスは事件から2週間後に開かれました。高校の校長先生は参加に同意してくれましたがその日のカンファレンスには学校関係者の参加は一人もありませんでした。幸いなことに二人が通った近所の小学校が柔軟に対応して下さいました。その小学校の副校長先生は（カンファレンスについて熟知していて）こちらのお願ひから15分で参加を承諾し、学校で開くことに同意してくれました。

¹ <http://www.realjustice.org/>

ビクトール君とトレントとのカンファレンスの進行役はこの目的が“誤った行動によって影響を受けた点について話し合うこと”と“その被害を補う為の方法を見つけようと努めること”であると説明することから始めました。このカンファレンスへの参加は自発的なものであるが、ビクトール君が参加しなければ、このケースは警察へ回されることになるかと付け加えました。次にビクトール君が発言しトレントの頭を“ひっぱたたいた”と認め、それは冗談のつもりだったと説明しました。またそれでトレントが泣き出して驚いたと言いました。次にトレントと私の夫と私が、ビクトールの行動によってどんな影響を受けたかを説明しました。具体的には、トレントが叩かれたことによって痛みを感じたと発言し、私は息子がまた痛い目に会うのではないかと、さらには今後ビクトール君がもっと深刻な事態を引き起こすのではないかと心配していると発言しました。

次にビクトール君の父親が発言しました。彼の発言に私と夫はびっくりしました。カンファレンスが始まるまで私たちは彼が無関心な父親だと思っていましたが、それが正反対であると分かりました。彼は息子について心配していることを話し、息子が喧嘩をしないようにさせようとしてきたことを話しました。カンファレンスはビクトール君の父親にとって、私たちの心配や、置かれた状況を理解するきっかけともなりました。彼は私たちが恵まれた環境で育ったと思っていましたが、私が高校中退で、当時青少年犯罪者として少年司法制度のお世話になったことがあると伝えました。カンファレンスは私たち全員が互いのことをもっと知りあい、それぞれの体験を理解しあう機会となりました。このプロセスを通じて私たちはよりよい関係を築きあい、互いを思いやる関係となりました。それはとても驚くべき体験でした。

小学校の副校長先生はビクトール君のサポーターとしてそこに参加していましたが（トレントには既に2人のサポーターがおり、ビクトール君には父親だけだったので）、実際には二人の少年のサポートをしていました。というのは、カンファレンスグループの進行の流れは参加者が互いにサポートし合うような働き掛けをしばしばするからです。その副校長は私たちに、ビクトール君とトレントが3年生の頃から二人のことを彼女がとても気に掛けていたことを話してくれました。そして彼女はビクトール君にはもっと自分の衝動性をコントロールする方法を身に付けてほしいと言いました。トレントには、ビクトール君の気持ちをもっと理解し、傷つけられたときに他の人を言葉で攻撃しないことも学ぶ必要があると言いました。二人が小学校に戻ってきて、建設的に問題を解決しようと取り組んでいることを彼女がとても誇りに思っていると熱く語った時には、私も彼女も涙があふれてきました。

ビクトール君がトレントを叩いたことによる影響について皆が話し終わると、“修復、和解、

安心の促進” のために何ができるかについてみんなで決定しました。私たちが合意したことはとてもシンプルなものです。私たちが合意したことはビクトール君が他の人を叩かないこと。トレントは自分の感情が害されるとどんな気持ちになるかを考え、自分を傷つけた人を侮辱する代わりに自分の気持ちをはっきりと言葉で表すことに取り組むことでした。ファシリテータは合意書を準備し、みんながそれにサインしました。私たちはそのあと、ケーキやクッキーやジュースと一緒に食べたり飲んだりしました。副校長先生は皆にハグし、ビクトール君の父親と私もハグしあい、夫は彼と握手しました。その日カンファレンスの結果としてコミュニティーが出来上がりした。その事件以来6か月が過ぎていますがトレントとビクトール君が問題を起こすことはありませんでした。

カンファレンスは誤った行動から学ぶチャンスである

カンファレンスは強力な学習の場です。まず加害者は自らの行動に責任を持つことで彼らが自分の行動の主は自分であると認識し、自己効力感や効果的な学習促進の基礎を築きま
す(Bandura, 1977)。リアル・ジャスティス・カンファレンスにおいてはまず加害者から発言し始めて、自分の誤った行動を認めます。次に彼らの過ちにより直接影響や被害を受けたコミュニティー（判事や校長といった第三者が他の人への被害について説明するのではなく）からの話を聴きます。これにより特に若い加害者が、再犯を避けるために大事な資質である共感性を伸ばす機会を得ます(Goldstein and Pentz, 1984)。リアル・ジャスティス・カンファレンスでは、被害者がどんな被害を受けたかを加害者に直接語ります。3つ目に、グループは意見を一致させて決定に至るので独裁的な決定よってなされるものよりは道徳性の発達が期待できます(Kholberg, 1964 and 1969)。リアル・ジャスティス・カンファレンスにおいては、受けた被害を修復するために何がなされないといけないかを全員合意の上で決定します。

最後に、加害者はカンファレンスにおいて **reintegrative shame**（再統合的な後悔を促す社会的なプロセス）を体験します(Braithwaite, 1989)。**Reintegrative shame** は **stigmatizing shame**（汚名を着せるためのプロセス）よりは行動の変化に効果があります。後者は加害者がその良くない性質のため区別されてしまいます。例えば、「私は浮気者だ」というサインを持つようなものです。また、**stigmatizing shame** では加害者がグループに入ることはありません。これに対してカンファレンスでは加害者の良くない特質や気質ではなく、誤った行動について焦点を当て、加害者の周りにサポーターが参加します。カンファレンスのこういった側面は、加害者の誤った行動の影響への対処後も加害者がコミュニティーのメンバーとして引き続き受け入れられることを可能にします。こうしてグループの一員であり続けることは加害者がその先もコミュニティーの基準に従い続ける可能性を高めます。カンファレンスにおけるこの共同体主義的な要素は再犯を防ぐために必須の要素です

結論

カンファレンスは被害者、加害者、その家族、友人や学校のニーズに応じた、誤った行動への公衆衛生的なアプローチです。そしてこれは加害者がその過ちを認めた時の、学校における対立解消手続きの標準的手法となりえるものです。このプロセスでは、共感性や問題解決のスキルが養われます。加えて、誤った行動による最大の影響を受けた被害者が一体となって修復に向けて前向きにかかわる事ができることを学ばせます。カンファレンスのこの側面は参加者の気持ちを希望に満ちたもので楽観的なものにします。楽観的な感情は人が対処法やレジリエンスを伸ばすために極めて重要です(Seligman, 1990)。カンファレンスはとても効果的な方法で、誤った行動から人間関係やコミュニティーを作り出します。そしてそれは学校を強化する可能性に満ちているものでもあります。

References:

Bandura, A., (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review* 84, 191-215.

Braithwaite, J., (1989). *Crime, Shame and Reintegration*. New York.: Cambridge University Press.

Cameron, L. and Thorsborne, M., (1999). Restorative Justice and School Discipline: Mutually Exclusive? [online]. Available: <http://www.realjustice.org/Pages/schooldisc.html>

Consedine, J. (1995). *Restorative Justice: Healing the Effects of Crime*. NZ: Ploughshares Publications.

Goldstein, A. and Pentz, M. (1984). Psychological Skill Training and the Aggressive Adolescent. *School Psychology Review* 13, 311-323.

Kohlberg, L., (1964). Development of moral character and moral ideology. In M.L. Hoffman & L. W. Hoffman (Ed), *Review of child development research* (Vol. I). New York: Russell Sage Foundation.

Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: the cognitive-developmental approach to socialization. In D. Goslin., (eds.), *Handbook of Socialization Theory and Research*. Chicago: Rand McNally.

Maxwell, G. (1996). *Restorative Justice: A Maori Perspective*. The New Zealand Maori Council. Wellington, NZ.

O'Connell, Terry, Wachtel. B. and Wachtel, T. (1999). *Conferencing Handbook*. Pipersville, PA: The Piper's Press.

Pranis, K. (1996). "A State Initiative toward Restorative Justice: The Minnesota Experience." In: B. Galaway and J. Hudson (eds.) *Restorative Justice: International Perspectives*. Monsey, New York: Criminal Justice press, pp. 493-504.

Schiff, M. (1998). Restorative Justice Interventions for Juvenile Offenders: A Research Agenda for the Next Decade. *Western Criminology Review* 1(1). [online]. Available: <http://wrc.sonoma.edu/v1n1/schiff.html>.

Seligman, M. (1996). *The Optimistic Child*. NY: HarperPerennial.

Shook, E. V. (1985). *Ho'oponopono: Contemporary uses of a Hawaiian problem-solving process*. Honolulu: University of Hawaii Press.